

社会科教育法における板書指導

三崎 徹雄

1. はじめに

筆者は大学で教員免許所得に向けた教職過程の教科教育法（中学校社会）を担当している。模擬授業を中心に指導技術を学ぶ講座である。教育実習に向けて、模擬授業も実践同様に50分授業を行うのが理想だが、1時限100分、14回の講座の中で履修者数を考えてそれぞれの持ち時間を設定している。学生のディスカッションを含め、こちら（教官）の指導助言の時間をできるだけ短くしても、約30分の模擬授業を1、2回ずつが現状である。事前に作成する学習指導案と板書計画の指導は、個別にメールで添削を行っている。

校種や教科が同じでも実際に学校で行われている授業には様々な形態があるが、教育法の模擬授業は指導教官の行ってきた授業形態を伝えることにしている。また、教育実習先では基本的には教科の担当教諭の授業形態を踏襲することになるだろう。学習指導案に関しても、大学や教育委員会の研究会などで改善され統一した様式が作られてはいるが、必ずしもそれが完成形というわけではない。各研究会で作られた学習指導案と、採用試験で出題された様式が違うなどの例もある。研究授業等では必ず作成する学習指導案だが、板書計画を付ける場合も多い。今回、取り上げるのは、この板書の指導についてである。教師が授業でどのように黒板を利用するか、どのような板書が効果的か私見をまとめてみた。

2. 板書に関する考え方

前述したように、授業の形態は様々なので、例えばプリントによる学習や、電子黒板、あるいはモバイル機器の普及、パワーポイントなどのスライドの利用、コロナ禍で急激に進んだオンライン化等で従来の黒板を使用しない授業も増えてきている実情もある。しかし、ここでは教師が黒板にチョークで書き込みながら授業を進める形を想定して話を進める。また、教科による授業の特性もちろんあるが、ここで述べる対象の授業は中学校の社会科である。教育雑誌等に板書に関する特集が組まれることがあるが、研究論文というより体験に基づく実践報告の形がほとんどで拙著もその域を出ない。現場の教師からみれば当然と思われる内容も、教科教育法を履修する学生向けと受け止めていただきたい。

教師にとって板書は授業の内容をまとめ、生徒に伝える伝達手段である。生徒は板書を書き写すことにより、内容を理解し、それをいつでも見返すことができる。中学校における板書は、この生徒がノートに写すことを前提とした、いわば生徒のノート作りでもある。

しかし、板書を写す行為そのものは受動的である。ここでの指導の目的は、現行の学習指導要領改訂の基本方針である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた板書による指導技術を身に付けることでもある。

3. 板書計画

教科教育法の授業では毎回の模擬授業に対して履修者全員が板書計画を作成し、事前に教官（筆者）の添削指導を受けることとしている。実際の現場の授業では、毎回指導案を作成することはないであろう。しかしながら授業の準備計画は当然必要で、授業形態にもよるが、その基本が板書計画であると考ええる。授業の目標に向けて導入、展開、まとめを考えるのだが、授業の流れを切らずに、教師の解説や質問、生徒の意見交換や発表、板書でのまとめを行うにも板書計画は少ない労力で準備ができる台本にもなりうるのではないだろうか。

教科教育法の学生向けということもあり、板書の内容は教科書のまとめということになる。毎回の講座に自分の模擬授業ではなくても必ず提出させるのは、その授業の予習になるからである。ただし、模擬授業そのものはできるだけ教科書の内容から離れた話題や資料を取り入れるように指導している。授業は教科書から離れ、板書は教科書の内容をまとめる、矛盾しているようだが、説明や話の内容が教科書に書いてあり、読めばわかることなら授業を受けなくても済む。生徒の興味関心を引くためには、学習指導要領や教育課程を重視しつつ、様々な話題を提供し、生徒の予習や予想を超えてほしい。教科書の内容を伝えるだけでは授業ではなく、ただの発表になってしまうと講座の最初に伝えるのだが、実践できる学生は多くはない。

板書「計画」ということで、提出する学生の中には、黒板を仕切り「目標」「内容」「生徒の意見」「まとめ」等の位置を枠だけで示したものを作成してきたものもいるが、ここではタイトルを初め、黒板に書くすべての文を書き込み、レイアウトを含めて完成形として提出させている。社会科の場合は教科書同様、横書きが原則である。

4. 板書における文字の量、色使い

中学校の板書では1時間の板書内容を消さない、ということがよく言われる。時間内の指導内容、それに伴う板書の量、そして最後のまとめが一目で分かるように、この「消さない」ことは妥当であろう。黒板の大きさはJAS規格の学校用大型黒板3600×1200を想定している。

では、全体の板書の量はというと、まず字の大きさが関係してくるが、当然、後方の席の生徒に見やすい大きさを基準として、横書きで10行書ける文字の大きさが適切だと思われる。教室の前の端の席の生徒が見にくいこともあるので、黒板の左右の端は使わないようにして、黒板は左右に二等分、生徒から見て左側がノートの上、右側がノートの下になる形で、全体として20行で1時間分の授業内容をまとめるように板書計画を指導している。なお、学生の身長によっては横に約7行ずつ三分割でも問題はない。資料や地図を示したいときは、ノートに貼れるプリントなどを用意して補うことも必要であろう。

文字の色は白を中心に膨張率が高い黄色で強調するのが良いだろう。最近は色弱対応のチョークができていますが、多くの色チョークの中には見にくい色もあるので気をつけてほしい。強調するには、太く書く、アンダーラインを引くなど工夫できるが、教師なりの一定のパターンを作りあげてほしい。

5. 効率的な文の形

黒板に、まず教科書と同じ番号とタイトルを書く。教科書の構成上、章の初め、あるいは節の初めに当たる場合にはそれも板書する。日付は、指導はするが、ささやかな主体性の育成のために任意としてもよい。ここから授業の内容に入っていくが、限られた字数、行数で効率的に授業の内容をまとめるためには板書の文の形も重要である。教科書の内容をまとめるということで、小学校では句読点を含めた文章として板書は書かれていくと思われるが、中学校ではできるだけ字数、行数を減らしたい（理由は後述する）ので一般的な文章にしないことを基本としたい。タイトルで分かれば主語は省く、語尾はできるだけ体言止めに、場合によっては箇条書きや用語のみを並べる、などである。

板書はまとめであって説明ではないと考えたほうが良い。学生の板書でよくあるのが、教科書の文を使った説明である。動詞や形容詞を用いた文章で長くなる。意味が伝わるなら、できるだけ動詞を使わず体言止めなどで工夫したい。例として、新聞の見出しをあげたら分かるだろうか。理解できる範囲で字数を減らすことを意識して、言葉の重複も避けたいところである。なお、教科書の太字は必ず板書することを心掛けてほしい。

教科教育法の課題提出はPCによるワード形式にしているが、実際の授業のための板書計画は手書きが良いだろう。生徒のノート作りという側面もあるが、黒板に正確な字を書くという大前提がある。誤字や癖字に気を付けるのはもちろん、書き順にも注意してほしいのである。板書というのは書くところも見られていることを意識してほしい。日常生活ではさほど支障のない書き順も、小学校で習ってきた生徒達の目は厳しい。笑われるような書き順をしていたのでは、信用を失い授業内容どころではなくなってしまう。

他にも、字の大きさや行の傾きなど、なかなか思い通りには書けないものである。十分に練習を積んで授業に臨んでほしい。

6. 内容とレイアウト

中学校の社会科の授業といえ多くの生徒が、先生の書いた黒板の字を写す、と答えるのではないだろうか。もちろん、授業は思考力、判断力、表現力を伸ばし、発揮するものでなくてはならないが、それを踏まえたうえでここでの話は板書に特化して進めていく。繰り返しになるが、一般の中学生であれば、教師が黒板に書いたことを反射的にノートに写す。そこで、中学校の板書は生徒のノート作りを意識したものを考えてほしい。結果的に一時間分の授業内容がノートに残される。これを後で見返した時に、授業の内容がわかるようでないと困る。同時に、生徒にはどのようにノートを整理したら見やすいのかもわかってほしい。そのために内容とともにレイアウトを工夫する必要がある。この時に重要なのがタイトルである。大きな章の初めには、まず章の名前を教科書と同じ番号と文で

書く。章を書くのは最初だけである。次に教科書の構成で節（これを単元とする場合が多い）となっている場合はこれも教科書通りに書く。漢字を含めて教科書通りに書くのは、生徒に余計な疑問を抱かせないためである。この「節」を書くのも、その節の最初だけである。ほとんどの中学校社会科の教科書は見開き1ページが1時間分の構成になっていて、それぞれ授業名が書かれているので、次にその授業名と番号を板書する。つまり、章の最初にはタイトルにあたる部分が、章、節、授業名と、2～3行にわたることになるが、章や節の概要はその時に説明したり考えさせたりして板書をしていく。もちろん最初でなければ、番号と授業名がその日の板書のタイトルとなる。ノートを見返して、教科書で復習する時にこのタイトル（授業名）が重要になってくる。

板書に関する指導の一つに、本時の目標（小学校では「めあて」）や学習課題を書くというのが散見されるが、筆者はその必要はないと考えている。目標や課題の確認は必要だが、本時の内容と目標を考慮した上で付けられたものが、それぞれの授業名なので、タイトルを書けばわかるはずである。生徒にも「主体的に」タイトルから内容を意識する習慣をつけさせたいとも考えている。また、限られたスペース（行数）、授業時間を授業の内容のために確保して、できるだけ無駄を省きたいという理由もある。なお、最初に日付を書くことも考えられるが、この際も4/20のようにできるだけ簡潔にしたい。

1時間の授業内容は複数（2～4）に分けられていることが多く、それぞれに小見出しが付いている。授業名の次は、教科書が分けている小見出しごとに教科書の内容をまとめていく。この小見出しも板書をする時と、後で見返す時に重要である。板書の際には小見出しを書くことによって、内容を端的にまとめ、主語の繰り返しや言葉の重複を減らすことができる。何よりも全体を見やすくするので、〔カッコ〕で囲むなどして目立たせてレイアウトを完成させたい。

レイアウトは板書を見やすくする要素だが、パソコンで作成すると、左揃えになることが多く、そのまま提出してくる学生もいる。内容を分けるために行を空けてくる場合もあるが、段落や項目の行頭をずらすことで行を空けることなく、より見やすい板書計画を作成することができる。また、単語や短い言葉を縦に並べて行数を使うことは避け、横に並列して少ない行数で済ませ、その分、板書の情報量を増やすように指導している。

レイアウト（割付）ができれば、さらに分かりやすい工夫をする。色チョークや囲みについては述べたが、記号で良く使うのが矢印→である。文字を減らすために多用する学生もいるが、時間の経過や、原因と結果などの因果関係を表せるように適切に使用して効果を上げてほしい。

教科教育法で事前に提出する形式は、A4版で上に板書計画の左側、続けて下に右側で、生徒のノートと同じになる。

7. 黒板への書き方と速さ（タイミング）

ここまで板書計画を中心とした準備段階での指導について述べてきた。次に実際の授業（模擬授業）ではどのように効果的に黒板を使って授業を進めていくのか述べていく。

できるだけ多くの情報を効率よく伝えるためには書き方、時間配分も重要である。片面10行、全体で20行を一気に書くと10分はかかる。もちろん授業は、板書をしながら進め

ていくが、生徒がノートに写す時間をとらなければならない。模擬授業の最初ではこの時間を考慮せずに授業を行う学生が多い。高校生以上ではそれほど配慮しなくても良いかもしれないが、中学生が黒板を写しながら、別の内容の話（板書と同じ内容の話だとしても）聞いて理解するには無理がある。そこで、教師は説明をして板書をしたら、生徒がノートに写したことを確認してから次の行動に移らなければならない。ここで問題になるのが、生徒の板書を写す時間の個人差である。全員が写し終えてから授業を進めていくのが理想であるが、この場合は時間のかかる生徒に合わせる必要がある。結果として全体の授業時間に影響することになり、早く書いた生徒を待たせることになる。その対策の一つが文の形、行数、字数にこだわった板書計画である。板書の内容を文章にして長くすれば、それに比例して写す時間の差も広がる。できるだけ簡潔な形にして無駄な時間を省きたい。

もう一つの対策は、できるだけ短い文、できれば単語で区切って板書をしながら授業を進めることである。よくある授業の形態は、教師が一通り質問なり、説明なりをして、それを黒板にまとめる形である。1行か2行であっても、それが長いのである。そうではなく、教師は質問や説明をしながら、板書計画にある文を細かく区切りながら書いて、生徒の様子を見る。この時に教師からの質問を多くして「対話的」な状況を作り出す。生徒は話を聞き、質問に考えて答え、目で黒板を確かめ、手で写すことによって理解していく。短い文（単語など）では写す時間の差はほとんどない。これをテンポ良く進めることにより、授業の流れができる。また、生徒が疑問に気付く確率も高まり、教師にも質問を受ける余裕も生まれる。「対話的・主体的な深い学び」に近づけるのである。

同じ、1行の板書でも短く区切ることでその効果は大きく期待できるが、これは、授業のタイトルでも、小見出しでも応用することができる。また、スライド（パワーポイント）を使用する場合はアニメーション機能で活用してほしい。

授業時間を有効に使うためには少しでも余分な時間を削る必要がある。ちなみに、授業のタイトルであるが、筆者の現役時には、授業時間の前（休み時間）に教室に行き、事前に板書しておいた。特に章の初めのように2～3行にわたる場合は時間の節約になる。生徒も慣れるのに時間はかからない。また、それを見て教科書を開け、授業の準備も「主体的に」できる。チャイムが鳴ったら（授業が始まったら）板書してあるタイトルを示しながら説明すれば良い。

8. 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

教材研究を行い、教科書をまとめて、生徒のノート作りの参考となる板書計画を作成しても、授業の仕方によって教育効果は大きく変わってしまう。ここまで黒板を使った授業について述べてきたが、生徒にとって黒板に書かれたことを写すという作業は極めて受動的である。それを「主体的」にする工夫が板書を（ ）などで空欄にする方法である。板書計画で形が整うと、教師はそれを全部黒板に書いてしまうが、教科書を見ればわかるところは書かずに、生徒が探して埋めるのである。授業の最後のまとめに一部を消して復習する方法もあるが、最初から空欄にしておくのである。生徒を前に出して黒板に書いてもらってもよいだろう。机間指導で生徒が調べて書いていることを確認するのを忘れないようにしたい。

「対話的」については、すでに述べたが板書の内容を一方的に説明するのではなく質問に変えることである。そのためにも板書は細切れにするのが望ましい。板書に限ったことではないが、教師の仕事は「教える」ことではなく、「一緒に考える」ことだと意識すると、この質問で授業を進めるやり方が身についてくる。

9. 終わりに

今回は中学校の板書計画について述べたが、高校の場合は授業の質も細かく、量も格段に増えるため、板書を消して書き加えたり、二段の黒板を使用したりする必要がある。スライドやプリント中心の授業も多いであろう。

「主体的」な取り組みには、生徒の興味・関心が欠かせない。スライドや動画などの視聴覚教材の積極的な活用を模擬授業でも奨励している。さらに、地図で位置関係を示すことや、歴史で各時代の文化のように用語（人名・作品名など）が多い場合、公民の衆議院と参議院の違いのように表にすると分かりやすい場合など、補助資料としてのプリントが有効な場合も多い。その際にも必要な言葉を穴埋めのように書かせる方法が良いだろう。書くという動作が知識の定着に一役買うからである。このことは、PCでの文書作成では正しい漢字がすぐに変換されるが、漢字を覚えることには繋がっていないことからでも理解できるのではないだろうか。また、聞いて（耳）見て（目）書く（手）という経過が知識の定着には必要であろう。スライドやモバイル端末ではこの書くという動作が省かれることが懸念される。例えば、カーナビで正確に目的に着くことはできても、そこまでの道順は覚えられないことが多いのと似ている。その意味では、板書の内容や形式そのものより、板書を使った授業の進め方によって「主体的・対話的で深い学び」を実現することを意識した（模擬）授業を定着させることが第一の課題である。